Muse

帝国データバンク史料館だより［ミューズ］

TDB Historical Museum
2012.4
VOL.18

巻頭特集 テーマ展示新企画
読む、書く、伝える

くずし字に見る近代日本の夜明け

学芸員ファイル FILE No.007
地域に根ざした支所経営が生んだ **事業所の出版活動**

一枚の写真から
実に総勢600余名もの春の清遊会
―全国の支所長たちも、東京本社の社員旅行に合流―

［巻頭特集］テーマ展示新企画

読む、書く、伝える

くずし字に見る近代日本の夜明け

くずし字で書かれた江戸時代の引札

上／現金おろし小う里・大阪屋味岡与兵衛（木版・福助絵）
下／禁裏御典薬寮長官小森殿秘法 そめいさん（カッパ摺）
2点とも公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団 アド・ミュージアム 東京 所蔵

帝国データバンク史料館では、2012年4月24日（火）から6月29日（金）まで、常設展示室内「テーマ展示」コーナーにおいて新企画「読む、書く、伝える　くずし字に見る近代日本の夜明け」を開催する。

「くずし字」というと、古文書や錦絵などに書かれているものが浮かぶが、現代の生活の中でも「おてもと」や「生そば」、「うなぎ」など「くずし字」で書かれている文字を目にすることがある。また、今その「くずし字」を読みたいという要望が多く、全国の図書館や文書館、博物館をはじめ、市民大学などの生涯学習講座や通信講座で開かれている「くずし字解読講座」は高い人気だという。

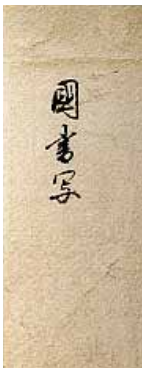
近世から近代にかけて残された史料には、急速に近代化を進めた日本の姿が描かれている。そしてその多くは「くずし字」で記録されている。このような「くずし字」で書かれた史料の中から、本展では、古記録や書類、書簡、店看板、錦絵など近世から近代にかけての史料を取り上げ、夜明けを迎えた近代日本の一側面を展示する。

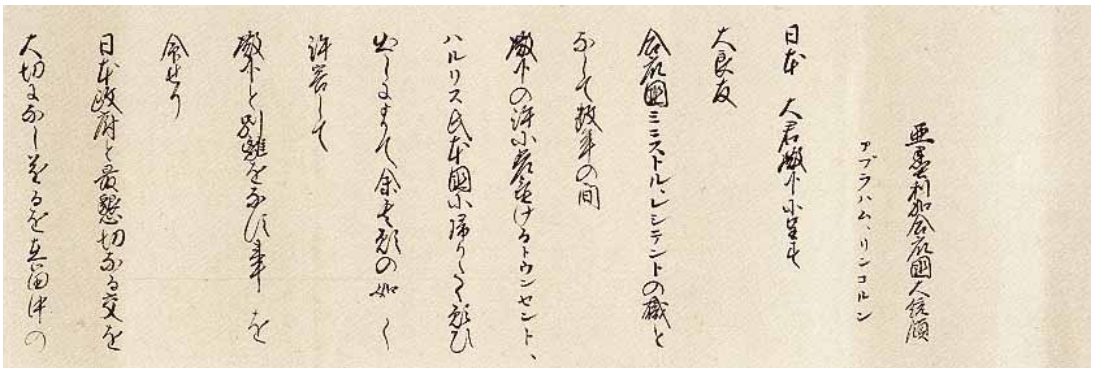
今号の巻頭特集では、今回の展示で取り上げる史料の中から一部を紹介する。

米国大統領リンカーンの国書訳文

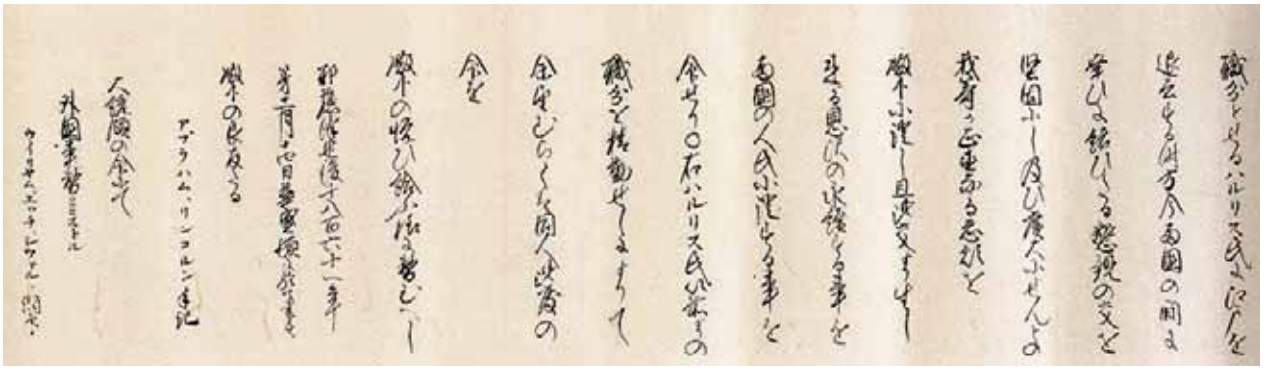
1861年
個人蔵（徳川宗家文書）

ペリー来航の翌年、1854（安政元）年、日米和親条約が締結され、日本の200年以上続いた鎖国の時代は終わった。56年、アメリカの総領事タウンゼント・ハリスは下田に着任し、日本で初めての総領事館を置いた。通商条約を締結することが第一目的であったハリスは江戸へ上り、58年、日米修好通商条約調印に成功した。しかしその後、61（文久元）年に体調不良を理由に帰国した。この文書は時のアメリカ大統領リンカーンが、ハリスの帰国願いをしたためた国書を翻訳したものである。





亜墨利加合衆国大統領
アブラハム・リンコルン
日本大君殿下に呈す
大良友
合衆国ミニストル、レシテントの職と
なして数年の間
殿下の許に差置けるトウンセント、
ハルリス氏、本国に帰りたく願ひ
出しによりて余者願の如く
許容して
殿下と別離をなす事を
命せり
日本政府と最懇切なる交を
大切になし遂るを在留中の



職分をせるハルリス氏に江戸を
退去する時方今両国の間に
幸ひに結ひたる懇親の交を
堅固にし及ひ広大にせんとの
我等か正直なる志願を
殿下に証し且此交より生し
来る恩沢の永続する事を
両国の人民に証する事を
命せり○右ハルリス氏以前よりの
職分を精勤せしによりて
余望むらくは同人此度の
命を
殿下の悦ひ給ふ様に務むへし
耶蘇降世後千八百六十一年
第十一月十四日華盛頓に於て書す
殿下の良友たる
アブラハム・リンコルン手記
大統領の命にて
外国事務ミニストル
ウイリヤム・エッチ・シウァル調印

重宝無尽灯用法記

江戸時代後期
東芝科学館所蔵

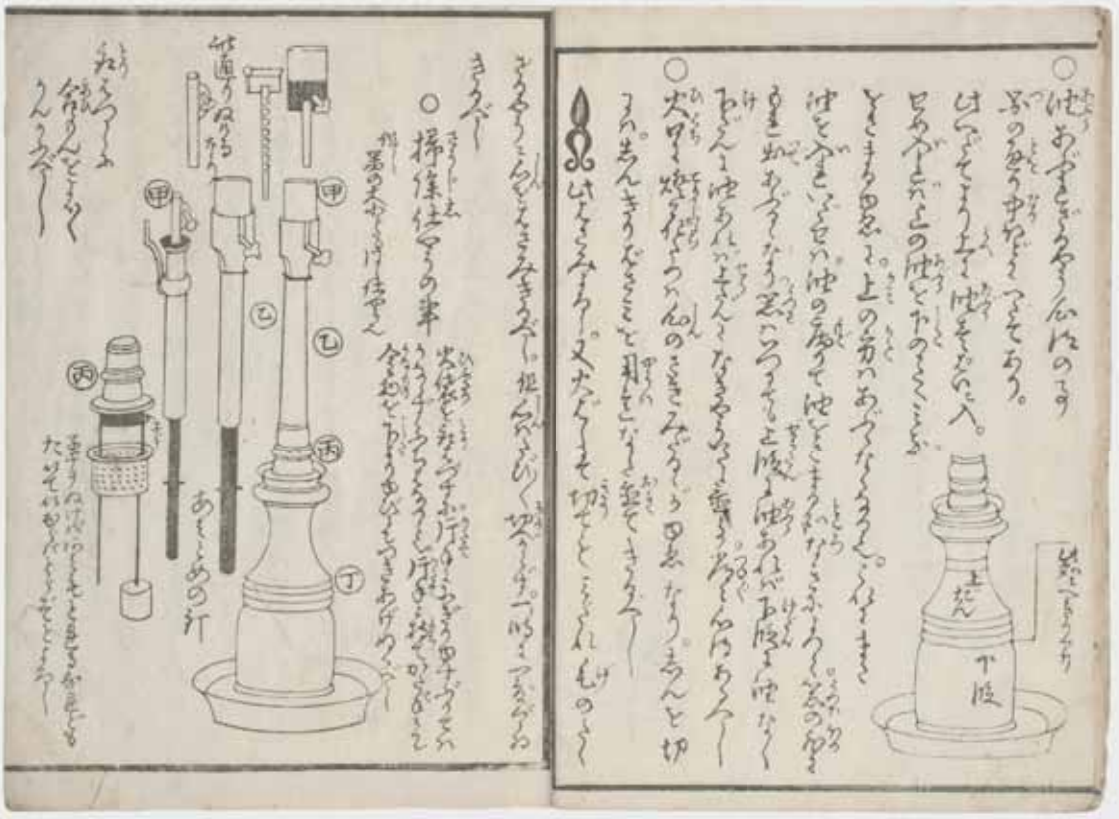
1837（天保8）年頃、東芝の創業者のひとりである田中久重は、蝋燭を使わず菜種油による灯器「無尽灯」を製作した。これはその「無尽灯」の取扱説明書・解説書である。

燃え尽きる度に交換しなければならなかった蝋燭とは異なり、自らが考案した風砲（空気銃）の原理を利用して、自動的に給油される仕組みを作り出した。この解説書の冒頭には、長年にわたる研究の結果生み出されたものであることが記されている。長時間の連続点灯と蝋燭の10倍もの明るさは好評を博した。こうした技術はやがて西洋技術の導入によりさらに磨きをかけることになる。73（明治6）年、75歳の久重は九州から上京し、翌々年銀座に工場兼店舗の「電気機及諸器械製造所」を開く。ここから東芝の歴史が始まることになる。

無尽燈の儀は予嘗て万家重宝四民有益の器を
製造なさんと志願を発し、若年のころより歳々年々
工夫にくふうを加え製する処なり。その根元は往昔阿蘭
陀人持来りしリクトパルレンという器俗に風炮と号く其の器は
火薬を用いず只風気を責込みこれを発するに火炮に異なら
ずとききしが文政年間予江府にいたりて始て其器を見て即其
器を製造し、且其の桟巧に基き無尽燈の管中に風気を
かって油をせめ上る理を発明すれど猶至らざる事の多かりし
より三十年来丹誠をこらして工夫なし漸く諸事に足ら
ざること無きよう成就なしたる其奇巧をいはんには油の循環
停滞なくして、かつ油の減りもことに少なく其上其光は蝋燭

田中久重(1799～1881)
東芝科学館所蔵

久留米生まれ。幼少の頃より発明の才能を発揮し、からくり人形師としてからくり興行で全国を回る。36歳で上方に移住し、万年時計などを発明。1853(嘉永6)年佐賀藩精煉方に入り、蒸気機関や大砲の製作に携わる。64(元治元)年久留米藩からの招聘を受け、その後75歳で上京。75(明治8)年銀座に店を構え、東芝の歴史が始まる。



油あぶれざるよう心得の事
図の通り中ほどにへだてあり。
此へだてより上に油壱ぱいに入
せめ入れば上の油を下のかたへみな
おさまるゆえに、上の方はあぶらなくなる也。これにまた
油を入れいだせば油の戻りて油おさまる処なきによって器の外に
もれ出あぶるるなり器はいつにても上段に油あれば下段に油なく
下段に油あれば上だんになきよういたし置事。常々心得あるべし。
火口に燈頭たつは心のさきみだるるがゆえなりしんを切
には、しんきりばさみを用意など置きてきるべし
此はさみよろし。又火ばしにて切てもみだれ毛のただ
ざるように心をはさみきるべし。
但心はたびたび切べからず下時に一度ぐらい
きるべし

銘田中久重無尽灯
江戸時代後期 田中久重作
東芝科学館所蔵

上から時計回りに
『秋田県名鑑』、『富山県名鑑』、
『京都商工大鑑』、
『長崎の業界と人物大観』

学芸員ファイル　FILE No.007

地域に根ざした支所経営が生んだ
事業所の出版活動

帝国興信所は1906（明治39）年より事業所の開設に着手した。横浜、大阪を皮切りに全国展開を進め、その数は戦前までの間に、のべ88ヵ所に上った。これら事業所の活動の特徴として、出版活動があげられる。帝国興信所では創業期から出版活動に力を入れていたが、事業所としては特に1920年～1930年代にかけて出版活動が目立った。

横浜・大阪を皮切りに全国

1906（明治39）年8月3日に横浜、8月10日に大阪、と相次いで帝国興信所は事業所を開設した。既に02年、横浜に出張所が存在していたことがわかっているが、支所としては第1号となった。大阪支所は大阪商業会議所の書記長の推薦で、元和歌山商業会議所の書記長であった人物を支所長に任命したが、営業成績は不振が続き、不審に思った創業者後藤武夫は自ら大阪に出向いた。現状は「翌年五月初旬午後二時頃何等の豫告もなく、大阪に往って支所經営の實際を視察したのであるが、（略）支所長始め支所員の全部は、勤務時間中にもかかはらず午睡の夢を貪っていたのである。」（『後藤武夫伝』1928年、日本魂社）という状況であった。

武夫は支所経営改善のため、本社幹部社員であった横井鋭吉を支所長として赴任させ、自らも移住し陣頭指揮を執った。また当時大阪で興信所として実績をあげていた明治興信所を買収し、人材・営業基盤を獲得することに成功した。こうして大阪支所は再建の道をたどり、事業規模も拡大し、13（大正2）年には大阪本部と改称した。

草創期の事業所経営

明治から大正初期にかけて事業所を開設する際には、大阪のように現地の有力者を支所長に任命するため、商業会議所に紹介を依頼するなどしていた。無名の興信所が地域展開を行うには、地元の有力者を支所長に据えて顧客など営業基盤を整備した上で行う必要があった。

武夫はその手法について次のように語っている。

「東京本所に於ける會員激増の結果、調査の依頼は非常に増加した。隨つて全國に亘って調査網を完成するの絶對必要を認むるに至つたのである。（略）尚ほ別に樞要の都市には支所を設置すること、し、其の直接經營者たる支所長竝に從業員たる支所員の任命に就いては特別の注意を拂つた。当時東京本所には相当多數の從業員を有して居たが、未だ以て支所經營に任ずべき人材を養成するまでには至らなかった。さうした關係から、支所設置に先つて、其の地方に於ける商業會議所の如き、直接商工業者に關係深き機關を通じて人物の銓衡方を依頼し、其の推薦によつて、支所長竝に從業員を決定したのである。」

当時の事業所運営の方法としては、独立採算

◁社内報に掲載された
『秋田県名鑑』刊行のお知らせ

『脱俗』第172号（1926年12月）に、秋田支所が『秋田県名鑑』を発行する旨が掲載された。『秋田県名鑑』が先駆けとなり、以後『名鑑』『大鑑』の刊行が増えた

◁『秋田県名鑑』
『京都商工大鑑』の収支報告

社内報『脱俗』では、事業所の出版物について、収支報告が掲載されていた。上段は『京都商工大鑑』（『脱俗』第203号、1929年7月）、下段は「秋田支所の快挙」と題された『秋田県名鑑』（『脱俗』第178号、1927年6月）の収支報告

制を採っていた。28（昭和3）年に出された通達文書に「元来帝国興信所は本支所総て独立の経営を為すべき方針の下に経費の支出は当然経常収入を持って支弁し来り」（『告示簿』1928年11月27日）と記載されていることからもわかる。支所長の裁量権は広く認められていたが、営業不振で業績が上がらずに赤字になるようなことがあれば、支所長が補填することとなっていた。

事業所の出版活動

信用調査業においては、出版物の発行は主要な事業のひとつであった。当社も例外ではなく、『帝国銀行会社要録』や『帝国信用録』といった興信録を発行していた。各地に展開していた事業所では、企業情報をはじめとした地元経済や名士の情報を網羅した独自の出版活動が多くみられた。それぞれに共通して掲載されているのは、各県下の産業の概要、銀行・会社の概要、経営者や高額納税者等のデータである。また広告も多数掲載されている。

『関西業界人物大観』

1926（大正15）年1月から約10ヵ月間、経済情報紙『帝国興信日報』大阪版に連載した記事を再編集したものを大阪本部が刊行した。巻頭の序文には当時の大阪商業会議所会頭で稲畑産業創業者、稲畑勝太郎が寄せている。政財界の140人について述べたもので、全2巻合計850頁の大作である。

『秋田県名鑑』

1927（昭和2）年4月、秋田支所が支所開設10周年を記念して刊行した。市町村別の高額納税者の情報から始まり、銀行、会社、組合の概要、巻末には経営者や団体、官公署、学校の職員録が掲載されている。「緒言」に「されば本書一巻を繙けば座ながらにして秋田縣其の物が眼前に展開されるのであります。」と書かれているとおり、企業の情報から人物情報まで網羅され、その充実した内容は1500部完売の大ヒットにつながった。この成功を受けて、各地でこうした名鑑の発行が相次ぐようになる。

『京都商工大鑑』

1928（昭和3）年11月、昭和天皇の即位を記念して京都支所が刊行した。京都府の人口や土地、交通などの府勢、京都の主要な産業の概況、府勢統計、織物・呉服・製茶などの主要産業をはじめとした企業や商工業者のデータ、紳士録のほか、滋賀県下の各種産業の概要も掲載されている。写真もみられる企業人のプロフィールは1300人に上る。

『富山県名鑑』

1928年12月、『京都商工大鑑』と同様に昭和天皇の即位を記念し、また支所開設15周年を記念して富山支所が刊行した。県下の産業について、地域別に主要産業の件数と生産額など詳細に記載されている。他に銀行・会社・産業組合のデータと、個人納税者、付録として官公署団体職員録が掲載されている。

『長崎の業界と人物大観』

1931（昭和6）年4月30日、長崎支所が刊行した。地域ごとの主要産業などの概況のほか、銀行、会社、個人のデータが掲載されている。そのほとんどは銀行会社であれば建物、個人であれば肖像写真が掲載されている。また他の事業所とは異なり、非売品であった。

▽尾道支所

尾道支所の玄関前に立つ八幡義朗。当時は事務所兼八幡の自宅であった。八幡は28歳の時支所長代理から支所長に就任。以来34年間務めあげた

▷『秋田県名鑑』
『京都商工大鑑』の広告

刊行にあたって『帝国興信日報』に掲載された広告。上段が『京都商工大鑑』の広告（1928年11月18日）、下段が『秋田県名鑑』の広告（1927年5月5日）

こうした事業所展開や運営方法、地道な調査・出版活動により、調査網は全国へと広がりを見せた。武夫は自伝の中で「（略）六大都市における支所は何れも模範的となり、其の地方における銀行會社及び商工業家よりは充分の信任を得、調査網は全國を通じて隈なく張られ、（略）如何なる至難の調査、遠隔の地に在る調査事項と雖も、旬日を出でずして報告し得ることとなった。斯して所運は隆々乎として発展向上を續けて居るのである。」（『後藤武夫伝』）と述べており、当初は難航した事業所展開が円滑に進んでいることがわかる。

■事業所独自の出版物一覧（1945年まで）

山陰事業名鑑 西伯郡之部	米子支所	1912.12.22
静岡地主名鑑	静岡支所	1916.4.3
関西業界人物大観	大阪本部	1926.12.1
秋田県名鑑	秋田支所	1927.4.5
京都商工大鑑	京都支所	1928.11.1
富山県名鑑	富山支所	1928.12.28
三州業界人物大観	鹿児島支所	1930.9.10
長崎の業界と人物大観	長崎支所	1931.4.30
日向商工大観	宮崎支所	1932.10.25
尾道大観	尾道支所	1933.9.15
職業人山形県納税名鑑	山形支所	1935.12.25
樺太商工人事興信録	樺太支所	1941.3.15
青森県実業要覧	青森支所	1941.12.25
道南会社組合要録	函館支所	1942.3.12

時代とともに移り変わる地域経済

1933（昭和8）年9月に刊行された『尾道大鑑』は、尾道市の沿革、産業・交通・貿易の検証、教育、市政、社寺仏閣、犯罪、花街など豊富な統計データが掲載されている。また口絵には尾道の風景、銀行のページには各銀行の建物と支店長の写真も掲載されている。発行は尾道支所内に置かれた編纂部で、代表は当時の尾道支所長である八幡義朗が務めた。八幡も地元の名士で、郷軍連合会長、株式会社尾道芸子斡旋所役員、治安協力会副会長、尾道商工会議所議員、尾道商工業協同組合副理事長などの役職を引き受け、当時まだ理解されないこともあった信用調査というものを、地域に認知させていった。

しかし尾道支所は経済情勢の変化やインフラの整備により、その役目を終えることとなった。尾道は広島県東部の交通の要所であり、同時に中四国の物資集散地でもあったため、商港としての地位を築いてきたが、福山に陸運局ができてからは商圏が移り、66年に福山支店が新設され、尾道支所は74年に閉鎖となった。

事業所展開の跡は、日本の経済活動の地域的な移り変わりを示す。事業所としての形はなくなっても、地域の産業構造が変わっても、その証は事業所の活動として、出版物に確かに残されている。

一話入魂

帝国データバンクの創業者、
後藤武夫が残した魂をこめた言葉の数々。
そこには信用調査業という事業への
挑戦と苦労の様子が垣間見える。

これではならぬと思ふものの、
さりとてはまた局面の打開も容易なことではなかつた。
由來歎息と煩悶とは、やゝもすれば人を
失意の境に導くものであるが、私はさうしたドン底に陥つても、
自奮自勵、心窃に局面の轉回に圖つて、
決して悲觀の局に陥るやうなことはなかつた。
如何にしたら、我が帝國興信所をより善く盛大ならしむべきかについて
夙夜大に畫策し、縦横に奔走したのであつた。

『後藤武夫伝』後藤武夫（1928年、日本魂社）

1900（明治33）年の創業から2年が経過しても、「（略）私たちには、まだ一陽來復の春は到來しなかつた。事は志と違うて事業は振はないし、唯其日々々の遣り繰りに追はれて年は逝き年は來た。」（『後藤武夫伝』）と記されているように、後藤武夫は苦しい経営を迫られていた。

地道な営業活動で僅かながらも顧客を増やし、事業も軌道に乗りかかった矢先、思わぬ事件が立て続けに2件発生した。それは武夫の2度の収監事件であった。

1度目は00年12月、前職の帝国商業興信社在職中に約100円の金銭を使い込んだという容疑である。15日後に無実が判明して釈放されたが、武夫はいち早く会社の信用回復に努めるため、早々に事件の顛末書を配布した。しかし02年、当時世間を騒がせていた「馬蹄銀横領事件」に関連する恐喝の疑いで再び拘引されたのである。武夫は3日後に釈放され、免訴となるものの、このことは各紙で報じられ、結果2度の収監事件は帝国興信社の信用に大打撃を与えることとなった。必死に集めた顧客も離れ、調査件数も01年の498件から02年は285件と激減したのである。このように基幹事業の信用調査は不振。収入は経済情報誌『帝国経済雑誌』の広告料に頼らざるを得なかった。

冒頭の言葉はまさにこのどん底の時期を回顧したものであるが、悲観せず前向きに会社のことを考え、奮起するという武夫の不屈の精神が表れている。

この後、会社再建に向け武夫は株式会社への改組を目指すが、出資金集めは難航し、事務所の家賃の支払いも滞るなど、苦境の時代は続いた。

一枚の写真から

実に総勢600余名もの春の清遊会

―全国の支所長たちも、東京本社の社員旅行に合流―

1937（昭和12）年5月9日、帝国興信所東京本社春季清遊会が箱根で開かれた。1910年代頃から行われていた、社員や家族同士の交流を目的とした社員旅行「清遊会」は、東京や大阪、その他事業所が置かれた地域ごとに行われていたが、この年は全国支所長会議が前日から開催されていたため、樺太、平壌、台南、台北を含む全国の支所長50余名が合流し、約600名という稀にみる大所帯となった。

箱根地方は前夜雷雨やひょうに見舞われる悪天候であったが、当日は一転して晴れ渡った。一行は新宿駅の小田急線ホームに集合し、午前8時半、貸切電車で小田原へ。そこから登山電車に乗り換え、強羅に降り立ち、強羅公園にて記念撮影を行った。写真はその時のものである。撮影後はホテルで昼食をとり、午後1時解散となった。解散後は自由行動で、あるコースは社内報『脱俗』第297号（27年5月20日）によると、「強羅よりケーブルカーにて早雲山に上り、早雲山驛前よりバスにて大涌谷を經て湖尻に至る。湖尻よりモーターボートにて蘆ノ湖を横斷し、元箱根に着き、再び遊覽自動車にて十國峠を越へ熱海に向かつた。（略）午後五時熱海温泉旅館つるやに到着、温泉に浸り疲れを癒やし、午後六時より海に面した三階大廣間にて晩餐會が開かれ、所長のご挨拶があつて宴に入る。（略）一同十二分に觀を盡くして散會、随意歸京の途に就いた。」

東京本社の社員旅行に加わって箱根・熱海でリフレッシュしたのもつかの間、支所長たちは翌日東京の本社にて午前8時半から支所長会議最終日の予定をこなした。前日熱海で宴会が開催されたとは思えない強行スケジュールであったことがわかる。

『世界のビジネス・アーカイブズ ―企業価値の源泉―』が刊行

『世界のビジネス・アーカイブズ ―企業価値の源泉―』

公益財団法人 渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター 編
日外アソシエーツ 発行
定価 3,600円＋税
2012年 3月刊行

【目 次】

第一部◎歴史マーケティングの力

「フランスのビジネス・アーカイブズ、
経営に役立つツールとして ― サンゴバン社の事例」
ディディエ・ボンデュー（サンゴバン社、フランス）

「日本における伝統産業とアーカイブズ ― 虎屋を中心に」
青木 直己（株式会社虎屋、日本）
ほか

第二部◎ビジネス・アーカイブズと全国的戦略

「資産概念の導入と中国における企業の記録管理へのその効果」
王 嵐（中華人民共和国国家档案局、中国）
ほか

第三部◎アーカイブズを武器に変化に立ち向かう

「誇りある遺産 ― 買収・統合後の歴史物語の重要性」
ベッキー・ハグランド・タウジー（クラフト・フーズ社、アメリカ）

「アーカイブズに根を下ろして ―
IBMブランド形成に寄与する、過去の経験という遺産」
ポール・C・ラーサウィッツ（IBM社、アメリカ）
ほか

第四部◎アーカイブズと経営

「企業のDNA ― 成功への重要なカギ」
アレクサンダー・L・ビエリ（ロシュ社、スイス）
ほか

本書は2011年5月11日に開催された、公益財団法人渋沢栄一記念財団主催、国際アーカイブズ評議会（ICA）企業労働アーカイブズ部会（SBL）・企業史料協議会共催のシンポジウム「ビジネス・アーカイブズの価値―企業史料活用の新たな潮流―」での発表を中心に、近年発表された優れた報告・論稿を加え、翻訳して1冊にまとめたもので、当館は翻訳に協力した。世界のビジネス・アーカイブズの活動を本格的に紹介する書籍としては日本初となる。

この本には、IBM社、クラフト・フーズ社、サンゴバン社をはじめとするグローバル企業で、企業資料がどのように経営に活用されているかが描かれているほか、日本の伝統産業における事例として、株式会社虎屋が取り上げられており、長寿企業のアーカイブズが、商品開発やブランディングに貢献している様子が伝えられている。さらに、ビジネス・アーカイブズに関する国家的・全国的な枠組みがつくられている中国やイギリスの例、グローバル企業で各国にまたがる記録資料をどう管理しているかの調査報告も収録されている。

2011年に公文書管理法が施行され、今後、各地方自治体において公文書管理条例の制定が予想される。この本には企業や自治体組織にとって、公文書をどのように活かせるかのヒントが数多く含まれている。

ご利用案内

［入館料］無　料　［開館時間］10：00～16：30（入館は16：00まで）
［休館日］土・日・月曜日および祝日、年末年始（その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。）

交通のご案内

［JRご利用］中央線・総武線 市ケ谷駅から徒歩8分／中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分
［地下鉄ご利用］南北線・有楽町線 市ケ谷駅 7番出口から徒歩6分／
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分／丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

http://www.tdb-muse.jp/

帝国データバンク史料館だより《Muse Vol.18》2012年4月発行　©帝国データバンク史料館

帝国データバンク史料館
〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8　TEL.03-5919-9600（直通）
ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。